



## 第 1 回グローバル講演会が行われました

**講演者** 中部大学国際関係学部教授 和崎春日先生

**演題** 「異文化とともに生きる

～欧米だけではない地球の南北の学びが必要だ～」

4月25日(月)の7限目に今年度の第1回グローバル講演会が行われました。今回は本校のSGHの実践にも多大なご協力をいただいている中部大学国際関係学部教授の和崎春日先生にご講演いただきました。和崎先生は1976年よりカメルーン、ケニア、タンザニアなどのアフリカ諸国を32回も訪問され、フィールドワークをされました。前日本アフリカ学会副会長などの要職を歴任されるなど、まさに日本のアフリカ学の重鎮です。近年は日本などアジア諸国で暮らすアフリカ人の生活動態など、幅広い視野で国際社会を研究されています。

先生のお話は、常識にとらわれがちな私たちにとって示唆に富むものでした。まず、思い込みや偏見を取り払おうと呼びかけられ、私たちには他者に対するリスペクト(尊敬・敬意)が必要であると説かれました。その上で、世界を東西ではなく南北でとらえると何が見えてくるかという本題に入りました。



先生はクイズ形式で生徒に問いかけながら、日本のアフリカ学会の研究者数が1000名もいることや、春日井市に住む外国人の出身国は何と55カ国にもおよぶことなどを話されました。私たちが気付かないうちに、実は足下からグローバル化が進んでいることを認識しました。

次に、世界人口の将来展望に話が移り、2100年ころには国別人口はインド・中国に続きナイジェリア・タンザニア・コンゴなどアフリカ諸国がベスト10に入ること、すなわち世界経済におけるアフリカ諸国の存在が大変大きくなることを説かれました。日本・ドイツ・イギリスなど現在の主要先進国の人口は頭打ちであり、今後は成長するアジア・アフリカ諸国といかに良好な関

係を築いていけるかが大切であることを痛感する内容でした。

そして講演のテーマである「南北の学び」に入りました。私たちは、従来は「西洋と東洋」といった東西で世界を見てきた傾向があります。しかし先生は世界を理解するためには地球を南北でとらえ、考えることの重要性を説かれました。また、南北の関係の中には紛争・環境破壊・出稼ぎ・移民・他民族共生・ESDなど様々なテーマが存在していることも示されました。こうしたテーマは私たちが解決に向けて取り組むべき事柄も多いことが分かりました。また、歴史ある中部大学の国際関係学部にはトルコ学をはじめ、世界各地域を対象とする専門家がそろっており、高度な研究がなされていることも紹介されました。

最後に、人類が言語を発達させたメカニズムや、アフリカには多くの母音を持つ豊かな言語が存在していること、アジア・アフリカ諸国やそこに暮らす人々への間違った認識、偏見、思い込みを取り払おうと説かれました。

本校のSGHはベトナム・インドネシアなどのアジア諸国を実践テーマとしています。東南アジアからアフリカへと視野を広げて行くべきことを学んだ講演会でした。

では、生徒の感想をいくつか紹介します。

「いつか全世界が協力してもっと良い世の中になればいいなと思った。」

「春日井はグローバルだ。」

「春日井という狭い範囲なのに、アジアだけでなくヨーロッパやアフリカなどの多くの方が生活していることを知った。」

「言語には様々なメカニズムがあることが分かった」

「サン語は母音が多いのに驚いた。」

「日本とアフリカ、もっと仲良く。」

「被災地などを支援しに行くという考えではダメ。自分たちが教えられるという認識が大切である。」

「今までの考え方を見直し、南北が互いに理解し合い、尊重し、歩み寄ることが大切だということがわかった。」

「中部大学の国際関係学部は日本で一番歴史がある学部であることが分かった。」

「これからの世界はアフリカの人に支えられていくことになる。」

「これからもっとアフリカなどの異文化から学ぶという姿勢で勉強していきたい。」

